

台湾の高等教育における学習環境・学習支援のデザイン 2 The Design of Learning Environment and Learning Support for Higher Education in Taiwan 2

川面きよ（成城大学教育イノベーションセンター）

遠海友紀（東北学院大学教養教育センター）

嶋田みのり（東北学院大学ラーニング・commons）

千葉美保子（甲南大学全学共通教育センター）

池澤智也（亞洲大學資訊工程學系）

Kiyo Kawazura (Seijo University, Center for Educational Research and Innovation)

Yuki Enkai (Tohoku Gakuin University, Center for Liberal Arts Education)

Minori Shimada (Tohoku Gakuin University, Learning Commons)

Mihoko Chiba (Konan University, Center for Education in General Studies)

Tomoya Ikezawa (Asia University, Taiwan, Department of Computer Science and
Information Engineering)

要旨

本研究は、台湾南部の大学における学習環境・学習支援の現状を調査したものである。2019年の台湾北部での先行調査で指摘された、国立大学と私立大学の資源分配格差、部門間連携の不足、学習支援活動やコミュニティ形成の課題などについて、その後の変化と地域による特色の違いを明らかにすることを目的とした。調査の結果、各大学では変化する学生の学習スタイルに適応した環境整備が進められていることが判明した。一方で大学の学びに困難を抱える学生への支援は教務部局や学部が担当し、学習支援部門はより高度な学習ニーズに対応するケースが増えているという特徴が示された。また、教学改善を目的として競争的資金の積極的な獲得や地域における産業振興を見据えた学部改組、生成 AI に関する産学連携に取り組んでいることなども特徴的であった。

キーワード 台湾の高等教育、学習環境、学習支援、ラーニングcommons、ライティングサポート、Covid-19 / **Higher Education in Taiwan, Learning Environment, Learning Support, Learning Commons, Writing Support, Covid-19**

1. はじめに

これまで筆者らは国内外のラーニングcommonsに代表される新しい学習環境デザインや学習支援サービスに注目し、調査、研究を進めてきた（千葉他、2018；千葉他、2020；川面他、2024）。

世界的な潮流である教育・学習のパラダイム変換やコロナ禍によってさらに加速された IT 化が大学における学習環境デザインや学習支援のあり方を見直す大きな契機となっていることに異論を

唱える人はいないだろう。

これまで日本における学習環境デザインや学習支援サービスは先進事例として主に欧米の取り組みを参考にして導入、実践されてきた。一方で教育制度や文化的・歴史的なコンテキストに類似性を持ち、日本と同様に欧米の取り組みを参考に教育改革に取り組んできた東アジアの国々が学習環境や学習支援にどのように取り組んでいるのかについての調査や研究は、呑海他（2013）などがあ

るものの、その数は非常に少ない。著者らによる一連の調査は、アジアの大学における実践事例を知ることが、日本における学習環境デザインや学習支援サービス改善の有益な示唆となるだろうという問題意識の下、実施されてきた。

1.1. 前回調査での知見

台湾での調査は2019年に一度実施され、台北を中心に台湾北部に位置する国公私立5大学を訪問している。この2019年調査では、台湾では学習環境・学習支援ともに国からの助成金や寄付を基盤に私立大学よりも国立大学のほうが充実した施設・設備が導入されていること、設置形態を問わずラーニングコモンズを管轄する部門と学習支援を担う部門の連携があまり行われていないこと、施設・設備の整備にとどまっており、「空間」「活動」「共同体」という学習支援環境の3要素（美馬・山内、2005）のうち、「活動（学習支援）」や「共同体（学びのコミュニティ）」に関しては限定的であることなどが報告されている。また地域による学習環境デザインや学習支援ニーズに違いがあるのではないかなど、継続調査の必要性が述べられている。

加えて、最初の調査から5年が経ち、またコロナ禍を経た台湾の大学における学習環境や学習支援のデザインやそれにかかわる人々の認識がどのように変化したかについても再度調査する必要がでてきた。以上の理由から、今回の調査では台湾南部の主要都市に位置する大学を対象として調査を実施することとした。

1.2. 調査先選定について

具体的な調査対象は前回調査同様、Times Higher Education のランキングを参考に、地域による学習環境及び学習支援サービスの特色の違いについても確認するという点、またできるだけ多様な大学の事例を収集するという今回の目的に鑑み、台湾南部に設置されている大学から地域と設置形態の異なる3つの大学を選定した。

まず Times Higher Education World

University Rankings 2024（以下、THE2024）を参考に台湾南部の国立大学でトップにランクする台南の国立成功大学、台中でトップクラスの総合私立大学である逢甲大学を訪問先とした。また南部最大の都市である高雄に位置する私立科技大学で、多くの競争的資金を獲得し特色ある教育に取り組んでいる正修科技大学を訪問することとした。

台湾における科技大学とは、技術学院と呼ばれる工業系の専門学校の一部が1996年の大学設置の規制緩和により、いわゆる職業大学として大学に昇格したものを指す。

また調査期間内での訪問は叶わなかったが亜細亜大学の事例について現在、同大学大学院に在籍中の池澤から報告する。亜細亜大学は2001年に新設された私立大学ながら先述のTHE2024において台湾国内ランキングで3位にランクインし、国内外でのプレゼンスを急速に高めている大学である。

1.3. 調査内容について

訪問した各大学では施設を管轄または学習支援を担当する教職員にあらかじめ質問票を提出し、その質問票に基づいてヒアリングを行い、実際に学習支援に利用されている施設を見学した。

質問票の構成は大きく以下の3つのカテゴリー（表1）となっている。

2. コロナ禍を経た台湾の高等教育の現況

COVID-19による台湾の教育への影響は、政府の初期の対応が功を奏し、最小限に抑えられたと

表1 質問票の概要

カテゴリー	トピック
1 組織運営について	・学内での組織的位置づけ ・センターメンバーの構成/役割 ・採用方法と勤務体制 など
2 学習支援について	・学習支援の目的や特徴 ・オンライン学習支援の内容 ・現状の学習支援サービスの課題 ・ピアサポートスタッフについて など
3 学習環境について	・キャンパスの学習環境整備への関与と役割 ・学習スペースの利用統計 ・学習スペース・デザインの工夫 など

評価されている。2 か月程度の一斉休講などの措置は取られたものの、発令後すぐに台湾教育省の方針により、基本的に小学校から大学まですべての授業がオンラインに切り替えられた。

これらの措置に伴う救済策も合わせて展開され、受講のための機器の貸与や教材などの学習資源の提供から給食業者の食材損失まで幅広い支援策が講じられた（文部科学省、2024）。

こうした措置が迅速に行われた背景には 2003 年の SARS 感染拡大の経験があると言われている。徹底した防疫対策により、世界の中でもいち早く日常を取り戻した国の一つだと言えるだろう。

2021 年 9 月には初等中等教育の現場は基本的に対面に戻り、大学の授業については各大学の判断に委ねられたが、徐々に対面実施へと回帰し、今回の訪問時（2024 年 8 月）には、いずれの大学でもオンラインも活用されているものの、基本的には対面で授業が行われていた。

千葉他（2020）の報告では、2012 年にピークを迎えた台湾の大学生数は年々減少傾向にあり、日本同様にユニバーサル段階にあると指摘しているが、国内の少子化傾向は現在も続いている。

コロナ禍を経た現在の台湾の高等教育政策における重要なトピックとしては、1) 大学進学経路の多様化、2) 少子化の影響を踏まえた教育省による各種統制管理、3) 大学の閉鎖と統合、4) 高等教育深耕計画（競争的資金）、5) DX 推進と AI 人材育成支援などがあげられる（楊、2024；文部科学省、2024）。訪問時ヒアリングにおいてもこれらのトピックについて言及があった。

3. 調査報告

以下では、2024 年 8 月に実施した現地調査時の情報をもとに、訪問した逢甲大学、国立成功大学、正修科技大学の 3 大学および亜細亜大学における学習環境および学習支援プログラムについて各大学の特色および特徴的な取り組みを報告する¹。

3.1. 逢甲大学

逢甲大学は、1961 年に逢甲工商学院として創立

され、1980 年に逢甲大学となった私立の総合大学である。特に産業学と教学における研究が評価され、2012 年までの 7 年連続で台湾教育部より教学のモデル校として表彰されている（台湾留学ナビ、2024）。THE2024 では、1201-1500 位となっている。10 の学部で構成されており、大学院も併設されている。2023 年の学生数は 19,675 名（うち、学部生は 17,145 名）、専任教員数は 652 名となっている。

本調査では、図書館（本館）と人言教育センターの視察を行い、インタビュー調査を実施した。図書館の職員も人言教育センターの職員も、校長直属の組織として業務を行っている。

3.1.1. 図書館（本館）

逢甲大学図書館（本館）は、1961 年の大学創設のタイミングで設置された図書館である。書籍、雑誌に加え、電子書籍や電子ジャーナルを提供している。また、本以外の資料として、マイクロフィルム、視聴覚資料も提供している。

図書館の建物は地下 2 階、地上 4 階建となり、3 階までが図書館になっている。また 3 階までのエリアにも一部、学部の施設が入っている。

図書館では図書館職員に加え、学生アルバイトがおり、図書業務や資料のデータベース化の作業に関わっている。また、図書館では、本の購入や学内データベースの整備、資料の探し方など学習の基礎的な面についての支援を行っている。

大学の方針として、2020 年から 3 期に分けた施設のリモデリングを開始し、2023 年 12 月に第 1 期の作業が終わった。リモデリングの方針としては、「現在の学生の状況に合わせた対応」が意識されており、第 1 期のリモデリングでは、カラフルで視覚的に楽しい椅子や座りやすい席の整備、移動できるソファを設置したイベントスペース（図 1）や展示スペース（図 2）の設置、漫画コーナー（図 3）の設置などが行われた。

併せて、電子書籍の整備も進められた。また、このリモデリングとは別に、建物の耐震対応など行われた。



図1 イベントスペース



図2 展示スペース



図3 漫画コーナー

イベントスペースでは、図書館企画のイベントだけではなく、学内関係者や学生も申請すればイベントを実施できるようになっている。展示スペースでは書道の展示が行われており、専門の教員が常駐し解説するだけでなく、体験イベントも実施されている。

コロナ禍を経て、図書館での学生の学び方について大きな変化は見られないが、図書館をリモデリングしたことで、学生の滞在時間が伸びた。施設のリモデリングに際しては、特に利用者への調査は実施していないが、意見があれば取り入れつつ、他大学の事例を参考にすることで、第2期のリモデリングに向けた方針を検討していくとのことであった。

3.1.2. 人言教育中心

人言教育中心は、カフェテリアだった建物を2013年に改装し、教室やグループ学習用の部屋（グループスタディールーム）などを整備した建物である。建物の入口にスタッフのオフィスやアップルストアが設置されている。

教室（図4）は可動式の椅子と机、荷物置きがセットになった什器が設置されており、グループワークなどしやすい設計になっている。グループスタディールームは、ホワイトボードと4〜6人程度で使えるテーブルの設置された個室である。学生はwebで利用申請をし、学生証で入室して使う。利用は1回2時間までとなっている。その他、教員が会議などで使うミーティングルームや、フリーアクセスで学生が快適に使えるソファやテーブルが配置された部屋（図5）などが整備されており、学生が話し合いながら学習に取り組むことのできる環境が用意されている。

リモデリングの結果、話し合いながら学習に取り組む活動が以前に比べて活発に行われるようになったとのことである。教室に入らずとも、気軽に話し合いができる場所ができたことで、話し合



図4 教室の什器



図5 フリーアクセスのスペース

いなどの活動に取り組みやすくなったと考えられる。

3.2. 国立成功大学

国立成功大学は、台湾南部の台南市にある国立大学で、THE2024 では、501 位-600 位に位置する国内トップ大学の一つである。

学生数は 23,259 名、教職員数は 1,321 名であり、10 学部で構成されている。本調査では、図書館と教育開発支援センター（以下、CTLD）に訪問した。

3.2.1. 図書館

国立成功大学の図書館は、中央図書館、医学図書館、および「KnowLEDGE」（以下、新 K 館）の 3 つの建物で構成されている。本稿では、中央図書館と新 K 館について報告する。

中央図書館は地下 3 階から地上 5 階建てで、のべ床面積 35,282 m² の広さを有している。1 階は元々伝統的な図書館エリアであったが、2020 年から段階的にリモデリングが行われ、「Library」の頭文字「lib」と「リモデル (RE)」を組み合わせた「Libre」というエリアに改修されている(図 6)。このエリアは、ソファ席、ボックス席、漕ぎながら勉強できるバイク型の椅子など多様な座席があり、コミュニケーションができる学習空間となっている。また、可動式の机や椅子が設置されているセミナールームやプレゼンテーションエリアもあり、グループディスカッションやプレゼンテーションなど学生が能動的な学習ができる環境が整っている。什器は図書館の教職員が業者と共同で



図 6 中央図書館 1 階 Libre



図 7 新 K 館のラーニングcommons

デザインしたオリジナルなものが多く、全体的に明るくカジュアルな雰囲気で、改修以降、利用者が増加し、学生に人気の場所として定着している。

新 K 館は、学生寮の 1、2 階部分を改修して設置された共同学習空間で、図書館が管轄しているラーニングcommonsという位置づけとなっている。1 階には、コミュニケーションができるオープンな自習エリア(図 7)とイベントスペース、2 階には静かに学習できる読書スペースが設けられている。延べ床面積 414 m²、収容人数 100 名と比較的コンパクトな学習空間であるが、訪問時は、夏季休暇中にも関わらず、多くの学生が自習している様子が見られた。

授業実施期間中は、生活指導課によるチュータリングが実施されており、英語、微積分、工学数学、一般化学、一般物理などの基礎科目について相談できるようになっている。また、試験期間中は、24 時まで開館しており、学生が安全に帰宅できるように、キャンパス内およびキャンパスから 500m 以内の範囲で送迎を行うエスコートサービスが提供されている。

3.2.2. 教育開発支援センター

CTLD は 1995 年に設立され、教育のイノベーションを促進し、教育の質や学生の学習成果を向上させることを目的としている。本調査では主に「Trevi 揪課」および学生チューターに関するヒアリングを行った。本稿では、特色ある正課外プログラムである「Trevi 揪課」について報告する。

「Trevi 揪課」は、授業以外のテーマで学生が自分たちの興味に合わせて独自の学習コースを設計

して学ぶことができる自己主導型の学習プログラムである。揪課とは、台湾の若者間でよく使用している口語表現で、友達を誘って一緒に受講することを指す。希望する学生は、専用のウェブプラットフォーム(図8)で参加希望者を12人以上募り、CTLDにプロポーザルを提出して審査を受ける必要がある。学生が集まり、コースが採択されると、講師料などのコース運営に必要な予算が支給される。また、必要に応じてセンターのスタッフに助言も得ることもできる。プラットフォームには、授業シラバスのように、コース概要、学習目標、各回の学習内容や時間数、評価方法などが書かれており、単位取得の可否も明記されている。

2023年度は、全19コースが開設され、のべ497名が参加した。例えば、Notionというメモやタスク管理などができるアプリケーションの使い方を学ぶ9時間のコースには、53人が参加した。講師は、コースを企画した学生自身が企業など学外から講師を見つけて依頼することが多いが、学生が講師を務めることもできる。コースの採択率は約80%で、不採択の理由は、予算上の理由である場合が多い。また、コースは、対面でもオンラインでも開講することができるが、実際に開講されているコースのほとんどが対面で実施されており、対面形式のニーズが高い状況が続いている。

コースによっては、単位が付与されるものと、されないものがあり、学生講師のコースには、単位は付与されない。単位が付与されるコースを

受講すると、ポイントが付与され、6ポイント貯まると、1単位に換算できる仕組みとなっている。このポイントは、インターンシップや読書レポート、兵役、ボランティア活動など、「Trevi 揪課」以外の活動でも取得することができ、在学中は最大36ポイント分まで単位交換が可能になっている。プログラムの評価としては、実施後の受講者アンケートを採用しており、毎年受講者の満足度は高い状況が続いている。

以上、国立成功大学の学習環境及び学習支援について報告した。特に、CTLDが実施している「Trevi 揪課」のプログラムは、管見の限り日本の大学に類するものがなく、実施方法やポイント制度などの運営方法も大いに参考になるものと思われる。本原稿の執筆時である2024年10月現在でも、「Trevi 揪課」のプラットフォームには、民法、舞台芸術、楽器、起業、投資、資産管理、キャリアデザイン、コンピューターセキュリティなど多種多様なコースを学生が立ち上げている。正課外の学習プログラムには、授業以外にも、さらに学びたいという高い学習意欲が求められるが、こうした高い学習意欲をもった学生を対象とした支援も、学生の主体的な学びを促すうえで有効な手段であると考えられる。

3.3. 正修科技大学

正修科技大学は、台湾南部に位置する高雄市にある私立科技大学であり、1965年に「正修工業专科学校」として開校され、複数回の改名ののち2003年より現在の名称となった。正修科技大学では、工学部、経営学部、生活創造学部の3つの学部から構成され、専攻は21専攻、修士課程は14専攻、博士後期課程は1専攻、学生数は15,487名、専任教員406名、事務職員388名となっている(2023年現在)。正修科技大学は、理論と実務を組み合わせた教育を提供し、半期間や長期休暇期間、学部によっては年間を通しての実習が提供されている。

このような取り組みが評価され、正修科技大学は2022年Global Views MagazineのCorporate



図8 「Trevi 揪課」のプラットフォーム

Favorite College Student Evaluation Survey では、企業のお気に入り入りの大学生トップ 30 にランクインし、私立科学技術大学では2位にランクインしている。本調査では、図書館への視察、および国際事務室副室長柯武徳氏へのインタビュー調査を行った。

3.3.1. 正修科技大学における「高等教育深耕計画」の取り組み

正修科技大学は、台湾教育部「高等教育深耕計画 Higher Education Sprout Project」に採択され、2023 年度には2 億 4284 萬元の助成金を獲得し、全私立科技大学で第1 位、私立大学のなかでは台北医科大学について第2 位の助成金額である。「高等教育深耕計画」は、台湾の全大学を対象とする5 年一周期の競争型プロジェクトとして2018 年より実施され、現在は第2 期（2023～2027 年）となっている。正修科技大学の第2 期計画目標は「将来のニーズと国家の発展に対応する人材の育成（培育符應未來需求及國家發展之人才）」としている。

3.3.2. 図書館

正修科技大学図書館は、図書館棟にあるA 棟と、人文科学棟内にあるB 棟の2 つで構成されている。運営母体である図書館情報室は、情報を収集および管理し、教員と学生の専門能力開発、および豊富なコレクション、完全な設備、専門的なサービスによる学校管理のサポートのための理想的な図書館と情報環境を提供することを目的とし、2011 年8 月に図書館・計算機センターを統合した。書籍、定期刊行物、ビデオ資料、電子リソースなど、370,000 冊以上の書籍などが所蔵されている。本調査では訪問したA 棟に関して報告する。A 棟は、地下1 階、地上4 階の5 階建ての図書館棟であり、総面積は11,000 平方メートル、合計1,280 席の書籍、定期刊行物、電子リソースなどの図書館サービスを提供している。A 棟地上階は図書館エリアのほか、展示スペースや情報共有センター（図9）、瞑想スペース、コミックスペー

スなど、多様な空間で構成されている。さらに、チュータリングのための部屋が設置されているが、チューターの管理は教務課の管轄であり、学生の履修相談などで利用されている。また、社会人学生が多く在籍している科技大学ならではの特徴として、管内に授乳室が設置されている。

地下階にはゲームバレーと呼ばれる教員と学生に娯楽だけでなくコンピューター学習を提供するための空間が設置されている。

展示スペースでは、学部学生の作品を展示しており、訪問時は化粧品学科の作品が展示されていた（図10）。さらに北京の図書館との書籍交換を通じた交流を行っており、200 冊の書籍・電子書籍が提供されていた（図11）。図書館の上階部は

宿舎となっており、1 年生を中心に1800～1900 名程度の収容人数となっている（図12）。さらに、上述した「高等教育深耕計画」の一環として、2023 年10 月に図書館情報室とe スポーツテクノロジー学科主催のe スポーツ大会を開催するなどの活動を行っている。



図9 情報共有センター



図10 展示スペース



図11 北京との書籍交換交流スペース



図12 図書館の上部は宿舍スペース

3.4. 亜洲大学

亜洲大学は、2001年に台中健康暨管理学院として創立され、2005年に現在の名称へと改称した、台中市霧峰区に位置する私立の総合大学である。台湾の「美しい大学トップ10」にも選ばれており、敷地内には著名な建築家安藤忠雄氏が設計した亜洲大学現代美術館がある。この美術館は、台湾では「亜洲大学安藤館」として知られている。研究分野においては、コンピュータサイエンスの分野で高く評価されており、近年は人工知能（AI）に関する研究が注目されている。

THE2024では、亜洲大学は世界で401-500位にランクインしており、台湾国内においては3番目の順位を占めている。さらに、2024年現在、台湾で最も若い大学としても知られている。

8つの学院で構成されており、28の学士プログラム、22の修士プログラム、8つの博士プログラムを提供している。2024年の学生数は10,858名、専任教員数は363名（2024年現在）である。

3.4.1. 亜洲大学における産学連携の取り組み

亜洲大学は、2023年を「GENERATIVE AI年」

と位置づけ、2大CPUメーカーの一つであるAMDと協力して、"AMD Logic and Computation Laboratory"と名付けられた共同実験室を設置したことが注目されている。この実験室は、ハーバード大学とも協力し、AMDのアクセラレーションコンピューティング技術を活用して、中国医学やゲノム医療、AIに関連する実験を行うことを目的としている。

3.4.2. 図書館

亜洲大学図書館は、2001年の台中健康暨管理学院の創立時に設置され、大学を象徴するバロック風の建物（図13）に隣接する教務事務ビルL棟の2階から4階に位置している。図書館には、書籍・雑誌553,000冊、ジャーナル320種、電子リソース1,043,000冊、電子ジャーナル42,000種が所蔵されており、視聴覚資料も提供されている。また、図書館の役割としては、書籍や電子書籍の提供に加えて、新入生向けの図書館オリエンテーションや電子リソースの利用方法に関する講習、文献管理ソフトおよび剽窃チェックソフトの提供も行っている。



図13 図書館（右側の建物）



図14 AIカフェ

図書館内には、ノーベルゾーン、AI 体験センター、AI カフェ（図 14）など、多様な学習支援施設が設けられている。特に亜洲大学ならではの特色として挙げられるのは、ノーベルゾーンと AI カフェである。

ノーベルゾーンは、創立以来不定期で開催されているノーベル賞受賞者の講演会に関連する資料を集めた特別エリアである。これまで招聘された受賞者に関連する書籍や、受賞者が薦めた書籍が集められている。

AI カフェは、学生の共同学習スペースとして機能しており、節度を守った範囲での会話が可能な環境が提供されている。このエリアでは飲食が許可されており、学生は有料で提供されるコーヒーを飲みながら学習や議論を行うことができる。さらに、AI カフェは毎学期、学生がテーマに沿った発表を行う「Asia Talk」の会場としても利用されており、学生たちが自身の学びを発表し、他の学生と意見を交換する貴重な場となっている。

4. おわりに

今回の調査を通じて、台湾の高等教育における学習環境と学習支援のデザインが、前回の調査から大きく変化していることが明らかになった。コロナ禍への対応のための環境整備に加え、図書館や既存施設の改修のタイミングで現在の学生の学習スタイルに合わせた学習支援施設へとリモデリングされていた。2023 年に行った韓国での調査でも同様にリモデリングが進行していることが報告されている。

特に印象的であったのが正修科技大学の地域の産業のニーズやトレンドを見据えた人材育成のために学部・学科改組を、外部資金を獲得しながら積極的に行っている事例や、新設大学である亜洲大学が生成系 AI という世界的なトレンドをいち早くとらえ産学連携に取り組んでいる事例など、成長産業と人材育成の密接なかかわりである。

各報告では紙幅の関係から詳しく述べられていないが、学習支援についての質疑応答から、日本の高等教育における学習支援サービスは、大学の

学びで困難を感じている学生に向けたライティングや教科学習のサポートが行われるケースが多いが、台湾ではそういった学生への対応は教務部門や学部における対処事項として認識されていることが明らかになった。また、今回の調査対象の事例に限るものの台湾の大学における学習支援の活動は、より学習したい学生の学びを支援することが主たる活動となっているようである。

今回は南部に位置する大学群への訪問であったため、地域間格差にも注目し、台北と比較して学習環境や学習リソースへのアクセスに課題はないかについても尋ねたが、DX が進んだ影響もあるのか、いずれの大学も大きな差はないと考えているようであった。

今後、さらに少子高齢化が進み学生獲得の経路が複雑化していくことが予想される中で、各大学においてリメディアル教育やライティング支援へのニーズも高まることが予想される。これら日本が現在直面しているのと同様の課題に台湾の高等教育が今後どのように対応していくのか、引き続き注目していきたい。

註

¹各大学の情報は訪問時に聞き取った情報と、以下の各機関のウェブサイトの情報をもとに記述している。

逢甲大学

<https://www.fcu.edu.tw/>（2024 年 10 月 17 日参照）

国立成功大学

<https://www.ncku.edu.tw/>（2024 年 10 月 17 日参照）

<https://ctld.ncku.edu.tw/>（2024 年 10 月 17 日参照）

<https://trevi.ctld.ncku.edu.tw/>（2024 年 10 月 17 日参照）

正修科技大学

<https://www.csu.edu.tw/>（2024 年 10 月 17 日参照）

<https://sdgs.csu.edu.tw/?Lang=zh-tw> (2024年10月17日参照)

<https://li.csu.edu.tw/> (2024年10月17日参照)

亜細大学

<https://www.asia.edu.tw/> (2024年10月17日参照)

参考文献

千葉美保子・岩崎千晶・紺田広明 (2018) 「シンガポール大学教育からみる学生の主体的な学びを促す教育プログラム・学習環境デザイン」『関西大学高等教育研究』9, 91-99.

千葉美保子・川面きよ・遠海友紀・嶋田みのり・岩崎千晶 (2020) 「台湾の高等教育における学習環境・学習支援のデザイン」『関西大学高等教育研究』11, 121-129.

吞海沙織・溝上智恵子・孫誌銜 (2013) 「韓国の大学図書館における学習支援:インフォメーション・コモンズからの飛躍に向けて」『図書館情報メディア研究』11(1), 47-58.

川面きよ・及川ひろ絵・遠海友紀・岩崎千晶・嶋田みのり・千葉美保子 (2024) 「韓国の高等教育における学習環境・学習支援のデザイン」『関西大学高等教育研究』15, 113-122.

美馬のゆり・山内祐平 (2005) 『「未来の学び」をデザインする:空間・活動・共同体空間』東京大学出版会.

文部科学省 (2024) 『諸外国の教育動向 2023 年度版』, 明石書店.

台湾留学ナビ (2024) 『逢甲大学 (私立) の基本情報』, (https://taiwan-navi.jp/university/program_fengjia.html) (2024年10月15日)

Times Higher Education. (2024). *World University Rankings 2024*, (<https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2024/world-ranking>), (2024.10.15).

楊 思偉 (2024) 「台湾高等教育の現状と課題」『2024 年度第 3 回公開研究会報告資料』, ([https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/wp/wp-](https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2024/07/83e0e3932becb1be30b5dd86be27a5c7.pdf)

[content/uploads/2024/07/83e0e3932becb1be30b5dd86be27a5c7.pdf](https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2024/07/83e0e3932becb1be30b5dd86be27a5c7.pdf)) (2024年10月15日)

付記

本研究の一部は JSPS 科研費 JP20K14032、JP20K03100、JP21K02667 の助成を受けたものです。

謝辞

本調査にあたり、現地訪問先のコーディネートにご協力いただいた帝京大学高等教育開発センターの蔡 薰婕先生をはじめ現地調査に対応してくださった各大学関係者に感謝する。